表紙の〝人〟

Mr.フィギュア

今月の一言

万事急須

実は小生、遺伝なのか、度重なる万事休すのストレスからか、左の腸に「憩室（けいしつ）」があり昨年暮、炎症を起こし初めての入院を経験しました。憩室とは大腸にできる窪みで、休憩の部屋なので良さそうにも思われるが、実は休憩するのはウンチ君。便秘などで休憩すると、詰まって炎症を起こす。点滴と絶食により約1週間で退院したが、また食べ過ぎると再発しまた絶食治療になるから、食べることに貪欲な小生にとっては欲望との葛藤だ。病気する前は、胃腸が誰より丈夫といわれ、よく食べるねと感心され、子供や孫の残り物を食べる役目を自慢してきた自分の浅はかさを痛感する。

いずれにせよできてしまった憩室はもう治らない。これ以上悪化しないようにするだけだ。お医者さん曰く「もういい歳だから丁度いいじゃないの？」。なるほど、欲望に任せた自分ファーストの生き方を卒業しろということか。

人間の身体も車と同じで、調子悪いのはどこかの部品が故障しているからで、それを直すか交換するしかない。直せる部品があるうちはいいが、無くなれば廃車だ。しかも人間の身体は、車のように交換部品が簡単ではない。部品が壊れたらいくら他がピンピンしていても健康ではなくなる。子供の頃、今は亡き父がトイレにいる自分の下腹を触りながら左の腸に気をつけるよう話していたことがある。あれから60年近く経った今思うに、やはりそこが不調をきたしていた訳だ。故に自分の身体のどこの部品が弱いかしっかり把握し、少しでも長く使えるようにケアすることが、健康寿命を伸ばす秘訣なのだ。そんなこと分かっていると、おっしゃるだろうが、しかし怖いものなしの若い時はあまり気にしないのである。小生、還暦も過ぎ人生もかなり上り詰めたか思っていたが、先日104歳で他界された日野原重明氏曰く、75歳からが第三の人生が始まるとのこと。ちょっと寿命が延びた気分になるが、それも健康であってこそだ。

さて話は変わるが先日、愛知・知多の豊浜で鯛祭りに行った際、過去の罪を許してくれる神社があった。読者諸兄も沢山の万事休すを乗り越えて来たと思うが、中には謝罪することも若気の至りで多々あるのではなかろか？　そこでは許して欲しいことを「ごめんなさい用紙」に記入して、7月24日の地蔵盆（奇遇にも小生の誕生日と同じ）にお参りすると、罪を消してくれるそうだ。お願いしてみようかと思った瞬間、後方からかみさんが嘲笑うように一言！「あなたには、紙が何枚あっても足りないね！」　頷きながら神社をとぼとぼ後にしました。

ところで万事休すの類似語の多さに驚きました。「絶体絶命」「八方塞がり」「五里霧中」「四面楚歌」「袋の鼠」「前門の虎、後門の狼」など有名な諺のオンパレードである。極限の窮地に立ってこそ火事場の馬鹿力で、こんなクリエイティブなコピーが生まれるのであろうか？　片や今月のタイトル「万事急須」は「全てをやり遂げた後は、美味しいお茶を飲んで一服しませんか？」という日常の幸せ状態を言います。余談ですが「バンジージャンプ」はあまり恐ろしいので万事（バンジ）～休すから名付けられたとか…はさておき、駄洒落が命のMr.フィギュア、最期を迎える瞬間にも、渾身の一発が放てるかが問われるのである。

ではまた「Mr.フィギュア」で検索。

Mr.フィギュア　本誌の表紙に登場した一見あやしい、どこか可愛い、中年男性。愛犬チャーチルとはいつも一緒。その正体は、実在するビジネスマン恒川憲一氏をモデルに作られたフィギュア。月刊正論の表紙とこのコラムで、厳しく優しく、ダジャレをオシャレに織り交ぜた温かいメッセージを、読者のみなさまに届けている。

恒川憲一氏　つねかわ・けんいち　クリエイター。株式会社シーエムバー代表取締役社長。大阪芸術大学デザイン科を卒業後、広告代理店勤務を経て独立。15年間、絶えずフィギュアを持ち歩き撮影し、ダジャレを考えている。このコラムの真の執筆者。著書に『フォット、一息』（セルバ出版）。